婚礼の地域比較研究

Comparative Studies on Regional Characteristics in Wedding Ceremonies

濱　　保　久・韓　　暁　萍

目　次

はじめに
第１章　日本の婚礼
　第１節　伝統的婚礼
　第２節　新しい婚礼
第２章　中国の婚礼
　第１節　伝統的婚礼
　第２節　新しい婚礼
引用文献

はじめに

冠婚葬祭は民衆のコミュニケーション手段の一翼を担うものであるが、その形にはその国や地域の文化が反映しており、時としてそれはその地の文化の象徴であることも少なくない。本稿では、日本と中国の伝統的婚礼と新しい婚礼について報告するが、日本に関しては古い地域の典型としての京都の婚礼と新しい地域であるところの北海道の婚礼を比較する。

第１章　日本の婚礼

婚礼にまつわるしきたりや慣わしは地域によって異なるが、日本の場合中国に比べるとその違いは大きくはない。しかしながら、開拓の地である北海道の婚礼は現在の日本では極めて特徴的であるとよく指摘されている。ここでは、伝統的婚礼の代表として京都の婚礼をまず紹介し、その上で北海道の新しいタイプの婚礼を紹介する。

第１節　伝統的婚礼

「全体の流れ」

嫁入り婚に関する一連の婚姻儀礼は、１）「式前」の見合い（合意）から、婚約・結納、２）「式当日」の嫁迎えから婚家入り、両家への挨拶や祖霊に対する礼拝、披露宴と終了後の祝事、３）式後の贈答や振る舞いから構成されており、実はこれら構成要素のほとんどは中国と違いがないことが報告されている（吉村，2006）。

「結納」

結婚式が派手になったのは、江戸時代に台頭してきた富豪町民が武家結婚式を民衆化し、結婚を二度繰り返さないために大げさに行ったからであると、江馬（1949）は指摘している。また、東郷（1992）は、京都の豪商大丸下村家に残っていた江戸時代の婚礼記録を分析し、現在行われている結納の基本的例式は18世にすでに成立していたことを確認している。すなわち、１）吉日を選び、仲人が婿方からの結納及び目録を嫁方に届ける。２）折り返し嫁方からの受書を婿方に届ける。３）日を改めて嫁方からの結納を婿方に婚約承諾のしるしとして届ける。（江戸時代には結納受書で約定となり婿方への納品は嫁入りの際の土産として贈られていた）という一連の流れになるわけであり、正式な仲人を頼まれたならば式当日前から様々な役割を果たさなければならないのである。車から降りて座敷に通されるまで一言も言葉を発してはならないとか、改まった口上を述べなければな

らないとか大変なことも多く、式当日だけの形式的な仲人（会社の上司などが多い）とは重みが決定的に異なるのである。したがって、仲人に対するお礼の意味を込めた祝儀金はかなりの金額となる。新婚旅行の土産も友人たちへのものとは格が異なり、さらに仲人との付き合いはその後も続き、結婚後数年間は毎年の中元、歳暮も基本的には欠くことができないのである。

「花嫁道具」

伝統的には呉服や家具などの家財道具を嫁方が花嫁道具として婿方に持参していたが、現在ではこれに耐久家電製品が加わり、派手なケースでは新車の乗用車が贈られることもある。いうまでもなく呉服も家具も乗用車も高級なもので準備されるので、花嫁道具を一式揃えるだけでも相当な費用がかかる。嫁方の財力や娘を思う気持ちを表すものとして具現化された花嫁道具をぜひ多くの人々に見ていただきたいということで、一昔前までは京都でも「荷飾り」が普通に行われていた。「荷飾り」の日には家の周りに紅白の幕を張り家の中に娘のために準備した花嫁道具を陳列する。友人、知人さらには付近住民らが家の中まで上がりこみ箪笥の引き出しを開けては呉服の枚数、品質などを拝見するのである。

現在、京都でも「荷飾り」はほとんど見かけなくなったが、お祝いを持参した友人・知人らがその機会に呉服を拝見することは今でも一般的に行われている。花嫁道具に最も力を入れている名古屋の婚礼では、式当日に花嫁の家から花婿の家まで荷物を運ぶトラックも特別仕様になっており、すなわちトラックの側面に設けられた窓から中身が見える仕掛けが施されている。道すがら一人でも多くの人々に娘のために20年間ほど貯金をしてきた成果を見ていただきたいという気持ちからのことだという。

「お祝い」

遠方から結婚式に駆けつける参列者は仕方がないが、古くからその家と付き合いのある友人、知人はお祝いを式当日に持参するというようなことはしないのが普通である。岩上（1986）はそのような略式の作法を、非礼で無作法と戒めている。正式には、式の１か月ほど前から、吉日を見計らって花嫁あるいは花婿の実家にお祝いを持参する。大安、友引の日が好まれるが、たとえば先勝、先負の日にしか都合がつかないようならば、それぞれ午前あるいは午後（先が縁起がよいか悪いかの違い）に訪問する。訪問を予告しないでよいことになっているので、母親は式前１か月は大安、友引の日には家を留守にすることもままならない。

祝いは現金が一般的であるが、金封に入れたものをそのまま差し出すというようなことは正式ではない。20数センチ四方のへぎ盆の上に現金を入れた金封を置き、その上に熨斗、末廣を添える。熨斗は本来、子孫繁栄を暗示する鮑の乾物であるが、今はほとんどすべて紙で拵えたものが用いられている。末廣は未来が開かれるという意味から縁起がよいということとで扇子を添えてきた名残としてこれも模倣品が用いられている。これらの品を風呂敷に包んで持参するのであるが、さらに丁寧なケースではこれらの目録も準備する。独特の書体であるので専門店で書いてもらうことになる。目録には、一つ熨斗、一つ末廣、一つ五福（現金のことは品よく言い換えている。贈り先が花婿ならば五福でなく松魚となる）と記されている。

祝いを持参した友人・知人は奥の間に通され、菓子と昆布茶、桜茶などめでたいものでもてなされる。花嫁道具も拝見した客はあまり長居をしては迷惑になるので頃合いを見ていとまることになるのであるが、このときに家人から「おため」が渡される。「おため」とは懐紙を束ねたもので、婚礼時に限らず一般的に物を頂戴したときに相手に返す習慣が全国的にあった。たとえば東京の下町で隣からスイカの御裾分けをいただいたときに「おため」を渡していたことがあったようだ。この場合おためには、「いやぁまああありがとう。嬉しいわぁ。こんどまた何かあったらこの懐紙に包んでもってきてね。ほんとにありがとう」という気持ちが込められていたらしい。一見、厚かましく感じられるかもしれないが、「あなたの気持ちはそれほど嬉しいのよ。そして、今後もそんな気のおけない付き合いを私も望んでいるのよ」とい

うメッセージなのである。現在では日常生活で「おため」が登場することはまずないが、お稽古事の先生宅へ年始の挨拶に行ったときや、婚礼時においてはまだ「おため」が渡されている。しかしながら婚礼時の「おため」にはさらに複雑な仕掛けがある。

婚礼時の「おため」には祝い金のちょうど一割の金額を入れたポチ袋が差し込まれる。正確にはこのお金には「おうつり」という名前があるのだが、その言葉はまず知られておらず、このお金のことも「おため」と呼んでしまっているのが実情である。（以下本稿でもこの１割返戻金のことを「おため」と称す。）

では、なぜ祝い金の１割の金額の「おため」が返金されるのであろうか。このことについて諸説あるが、以下の説が無理のないものと思われるので紹介する。かつて立派な商家において、知人の子どもの婚礼に際し祝い金を持参するのは当家の主人や奥方でなくその店の使用人がその役を担っていた。そして、そのお使いの駄賃として祝い金の１割の「おため」が先方から使用人に手渡され、さらに店に帰ってきてからその「おため」を主人に示すことによって、全額きちんと祝い金が先方に届いたという領収書の役割をも果たしていたという。使いを命じられた使用人は喜び、かつ不正を防止するという先人の生活の知恵が生み出したこのシステムは、しかしながら当家の主人や妻が自ら持参する場合には意味を成さないのは明らかである。今の時代、家元など特殊なケースを除き、ほとんどすべての家では当主あるいは妻自らが祝い金を持参している。しかし、人々はそのように持参のあり様が変わった後も「おため」を渡し続けたのである。おそらくは周囲の目を気にしてのことであったろう。娘や息子の一生に一度の婚礼にけちがつくくらいなら「おため」を出すことくらいなんでもなかったのであろう。さて、「おため」をもらった方は、差し出されたものであるからその場でつき返すわけにもいかず、ありがたく受け取るものの本来のいわれからすると自分がそのままいただくのはなんとも落ち着かない。そこでしばらくの間、手をつけず箪笥の上にでも置いておいて、後日新郎あるいは新婦が新婚旅行のお土産をもって来てくれたなら、保管していた「おため」を「おため返し」として返すというまことに面倒なことを最近までやっていたのである。今は、もう昔のいわれも完全に風化しており、「おため」を受け取っても違和感がないためか「おため返し」までする人は少なくなっている。ちなみに大阪では当主や妻が祝い金を持参した場合には「おため」を渡さないという当たり前の対処が比較的早くからなされていたようである。

「披露宴」

披露宴には親族、知人、友人などが参加するが、伝統的婚礼では個人と個人の結婚という意味に加えて、両家の付き合いの始まりという意味も大きい。したがって新郎新婦の意見も尊重されるが、親の意向も無視できない。新郎新婦の友人のみならず、親の友人、知人らも参列することが珍しくなく、特に実家が自営の場合には取引先や政治家も参列することがある。そのような事情もあって、披露宴の会費制は極めて少なく、ほとんどが招待制で行われている。主催者は両家の親であり、とりわけ新郎の親が果たす役割は大きい。自分たちの子どもの結婚を世間の皆様にご披露するのに、忙しい中お越しいただく方から会費を徴収ことなど恥ずかしくて親としてはできないと考えるのは理解できる。しかし、招待を受けた者が手ぶらで参列できるはずもなく、当然祝儀を準備することになる。正式なお祝いの渡し方は前述の通りであるが、たとえば会社の同僚や学生時代の友人などは式当日に持参し受け付けに渡す。その際に、困るのは祝儀の金額である。会社の仲間の場合は、その会社によって相場が決まっており、また同じような立場で招待されている者が複数いるのが普通なので金額を決めるのはそれほど難しくはない。しかし、小学校時代の友人代表として招かれた場合には同じような立場の相談相手もいないため、相手との人間関係や披露宴の会場の格などを勘案し金額を決めなければならず、悩むわけである。金額も２で割り切れる偶数は、離婚を連想させるから好ましくないという考えもあるので煩わしさに拍車をかけている。

第２節　新しい婚礼

北海道は婚礼のみならず葬儀も特徴的であるが、そのひとつの理由として開拓の地であることがあげられる。すなわち、先住民族の伝統文化を除けば、北海道の生活文化がこの100年あまりの間に本州から移住してきた人々によって形成された混成文化であることにも一因があると考えられる。各地から入植した人々はさまざまな風習を有しており、どの風習が正しい風習であるかの判断はだれにもできなかった。多数派を占める出身地の風習が主流を形成したようであるが、矢島(1978)が指摘しているようにその習俗がその時代のその地域に受け入れやすいものであったからこそのことであろう。すなわち無理のない合理的な風習が選択されてきたと考えてよいのではないかと思う。また、開拓の厳しい土地では、かつて自分たちが暮らしていた本州の田舎とおなじようなことをしたくても、物理的、経済的制約でできないために(濱，1995)、やむなく簡素なあるいは代替のもので済ますということが余儀なくされてきたということもあるだろう。しきたりや慣習が厳しくなくのびのびして暮らし易いのは北海道人の合理性気質によるという説（岩崎，1989など）をよく聞くが、少なくとも婚礼に関して言えば、現在の原型は北海道人が積極的に生み出したものでなく、また50年以上の歴史の中ですでにある種のしきたり化過程も認められる。そのような点を含め以下、北海道の現在の婚礼を披露宴を中心に紹介する。

「会費制」

伝統的な婚礼における披露宴が招待制であるのに対して、北海道の披露宴（祝賀会）は会費制が主流である。その会費は当日会場の受付で渡すのであるが、金封に入れる必要はとくになく、多くの参列者はむき出しのまま現金を、あたかも学会の当日参加費を支払うような所作で係りに渡す。受付係りも手馴れたもので、それに驚くでもなく淡々と領収証を発行する。招待状を受け取った友人、知人はよほど親しい間柄でない限り、この会費以外にご祝儀を渡すことはしない。親友などが数人で別途品物を贈るということも最近では行われているが、別にそれをしないからといって礼を欠いたことにはならない。会費制結婚式に不慣れな本州人が、あらかじめ自宅に祝儀を持参したにもかかわらず、当日の受付で会費を請求され当惑するという混乱も生じている。

この簡素で合理的な北海道の会費制結婚式であるが、実は北海道で誕生したものではない。第二次世界大戦後の窮乏期に、生活の合理化をめざして展開された「新生活運動」が伝統の浅い北海道に定着したのである（佐藤，1999)。戦後、日本全体がまだまだ貧しいにもかかわらず、冠婚葬祭や中元歳暮などにお金をかける傾向が復活しつつあったときに合理的で質素な生活を推奨する「新生活運動」が全国的に広がった。当時の産業界が生産性向上と絡めて現在のクールビズのように後押ししていたことが当時の記録からも伺える（浅尾，1951)。自分の家だけ質素な婚礼をするのは恥ずかしく、つい見栄をはって無理をしてしまっていた庶民は、この運動の展開を歓迎し、日本全国に普及したのである。しかし、その後の本格的経済復興に伴い、豊かな地域から徐々に昔の派手な招待制結婚式へ戻っていったものと思われる。北海道は経済復興が遅れてしまったことなどもあり、会費制結婚式が定着する時間を与えられたのであろう。現在、会費制結婚式が主流なのは他には青森県くらいであり、やはり経済復興速度が影響していたことが推測される。

祝儀のかわりに安い会費をいただくだけで結婚式の費用を賄おうというこのシステムは参列者にとってもありがたいものであった。今でいえば数千円の会費を徴収し、本当に簡単な手作りのパーティをしていたのであろう。しかし、その後、会費は高額化の一途をたどり、現在では１万円以上が相場になりつつある。なぜ、手作りのパーティがこのように変化したのであろうか。この大きな原因に、ホテルでの披露宴の一般化があげられる。当初、会費制結婚式の会場は、自宅あるいは公民館や町内会館などであったが、手間がかからないという理由からホテルの利用が徐々に浸透していった。

日本におけるホテル披露宴の草分けは帝国ホテルであり、明治23年の創業時から披露宴会場とし

て使われていたが、ホテル内で結婚式と披露宴をセットにして販売するというブライダルビジネスの原型を関東大震災後に作り上げた（石井，2005）。現在、シティホテルの売り上げに占める宴会の割合はおよそ５割で、宴会の中で結婚披露宴が占める割合は大きい。企業のパーティとは違い、景気に左右されることなく毎年一定数を見込むことができるからである。しかし、会費制披露宴は招待制披露宴と違い、客単価が著しく低かった。招待制ならば両家が費用を負担するので客単価を２万円以上に設定しても受け入れられやすいが、会費制だと会費で相当部分を賄うのが原則であるから客単価も低く抑えざるを得ないのである。ちなみに、招待制ではフレンチのフルコースが一般的で、会費制では和洋中の宴会メニューが標準である。ひとつのテーブルに配される給仕の人数にも違いがある。北海道のホテルが結婚披露宴での売り上げを増すためには、１）招待制の普及、２）会費の高額化、３）参列者数の増大、しか方法がなかったのであるが、すでに定着していた会費制結婚式を崩壊させることは困難であったために、会費の高額化と参列者の増大を図ってきたのであろう。会費の高額化以上に問題なのは参列者の増大である。もともと招待制の参列者から会費をいただくというところからスタートした制度なのであるから参列人数はおのずと抑制されていた。招待制の場合、普通の家庭ならば通常100名以内で開催される。しかし、客単価の低い会費制でその人数だと売り上げが期待できないので、ホテルは参列者数でそれをカバーしたく、多数の参列＝人望の証というような図式を基に、参列者は100名を越して当たり前という雰囲気を促進させた。北海道新聞情報研究所（1993）によると十勝管内はとくに派手で、300人、400人の披露宴も珍しくないという。自営でなく普通の家庭同士の結婚で200名を超える披露宴は本州ではほとんどないが、北海道ではそれほど不思議なことではない。その結果として、新郎新婦はそれほど親しくはない友人知人にも招待状を送り、会費制結婚式当初のほのぼのとした手作り感は少なくとも都会での結婚式からは失われつつあるのが現状だ。

「発起人制度」

会費制結婚式につきものなのが発起人である。前述のように新生活運動の一環として普及した会費制結婚式ではあるが、当事者が会費制の案内を出すことには強い抵抗感があったのであろう。そこで、若い二人のために一肌脱いでやろうという発起人に企画運営のすべてを任せるという仕組みになったものと思われる。当初、発起人は実際に当日まで汗だくになって準備していたようである。今でも地方のごく一部では、公民会館などを借りてやる会費制結婚式において発起人は当日ジャージで働いていることもあるという。ところが、ホテルに主導権が移った現在において発起人が果たしている役割はほとんどなくなったといっても過言ではない。メニューを含め宴会内容のほとんどは新郎新婦とホテルの担当者の間で決めているにもかかわらず、形だけ発起人が存在している。発起人は、受付業務と開催の挨拶（時として司会を含む）およびアトラクションだけを担当しているのがほとんどで、開催の挨拶を除けば招待制の結婚式でも友人の誰かが担当している仕事である。にもかかわらず、丁寧なケースでは発起人の顔合わせ会が、また、式の後にはお礼の会が新郎新婦主催で行われる。完全に形骸化している「発起人制度」ならば、もう自分たちの名前で、案内状を出してもよさそうなものであるが、いったん定着してしまった慣習から北海道人はなかなか抜け出せないでいる。たかだか50年ほどのことであってもひとつのことが継続されるとそれなりの拘束力をもつという証左でもあり、北海道の生活文化が合理的なその理由は、決して北海道人気質が合理的なためでなく、いままでの歴史（先住民族の歴史を除く）が、さまざまなしきたりや慣習をまとわりつかせるにはまだまだ十分長くはないためであると考えられる。

第２章　中国の婚礼

中国の結婚式は民族によって、あるいは地方によってさまざまであるが、大きく分けると伝統的な婚礼と西洋からの影響を受けた新しいタイプの

婚礼に大別することができる。最近では生活の西洋化に伴い、後者が多くなりつつあるが、ここでは伝統的な婚礼について紹介した後に、現代の婚礼について触れることにする。

第１節　伝統的婚礼

周国強（2003）は、『中国年中行事冠婚葬祭事典』の中で、中国伝統的な結婚儀式「六礼」を紹介している。古代では、縁談から結婚するまでには、「納采」、「問名」、「納吉」、「納征」、「請期」、「親迎」の六つの儀式が行われていたという。これは「六礼」といわれ、2000年前の周代に定められた結婚の礼儀作法である。貴族や家柄の良い家庭では厳しく守っていたのであるが、庶民の場合はそれぞれの家庭の事情によって省略されたところも少なくない。ここでは、一般的庶民の伝統的婚礼儀式を紹介する。丁秀山（1988）は、伝統的婚礼を「提親」、「訂親」、「迎親」の三つの儀式に分けて報告している。以下、本稿ではその報告に基づいて三つの儀式を簡単に紹介する。

「提親」（縁談）

縁談は普通男性側の親が仲人を通して家柄のふさわしい女性側の家に婚姻の意志を伝えることから始まる（六礼の「納采」にあたる）。女性側が「提親」を受けると、男性側は占い師のところへ行き、男女の生年月日を占って、結婚の相性を見てもらう（六礼の「納吉」にあたる）。双方の相性が合わないとその段階で中止され、相性がよいといよいよ本格的に縁談が始まり、結納の条件などの話に移行する。このことからも、昔は、本人の意志より、家柄と相性が重視されていたことがわかる。現在は、相性にかかわる迷信を信じる人は段々少なくなってきたが、婚姻は生涯に関わる大事であるので、こっそり調べる親もいる。

「訂親」（婚約）

婚約の話がまとまると、日柄を選んで男性側が結納品をもって女性側に持参し、その後、親戚や友達を宴席に招待する（六礼の「納征」にあたる）。「訂親」は婚約を結ぶことで、とても重要な儀式であり、昔、民衆の間ではこれが法律の役割を果たすものだと認められていた。今なお大切な儀式として残っているが、しかし、法的色彩は昔に比べるとかなり弱くなってきている。

「迎親」（花嫁の迎え）

伝統的な中国の「迎親」というと、胸には大きな赤い造花を付けている花婿、赤い布で顔を隠した花嫁、四人か八人で担がれる華やかな花カゴ、チャルメラ、笙、打楽器などで編成される楽隊を連想する人が多い。これはよく映画の中で紹介されてきたシーンであるが、実際には花カゴや楽隊などを準備できるのは、貴族や家柄がかなりいい人々など、ごく限られた世界の風景であった。楽隊を招く余裕がなく、チャルメラ吹きの楽師だけを招く家庭もあり、また、さらに貧しい場合には、徒歩で花婿の家に向かった花嫁も少なくなかった。

「迎親」の乗り物は時代の移り変わりにつれて、ロバや馬車、自転車、ハンドトラクターや農業用オート三輪、オートバイ、小型乗用車などを経て、現在ではリンカーンやベンツなどのような高級車を用いるようになった。また、テープレコーダーやＣＤプレーヤーの登場に合わせて、多くの家ではこれらを利用し、楽師を招く費用を節約した。しかし、現在ではまた婚礼が派手になりつつあり、披露宴にバンドを呼んで生演奏をすることが流行っている。花嫁を迎えるにあたって音楽を奏でるのはにぎやかな雰囲気を作るためであり、その精神は昔から現在に引き継がれているのである。

以上が中国の伝統的婚礼儀式の流れである。以下、伝統的婚礼の慣習をいくつか紹介しよう。

「哭嫁」

花嫁は実家を離れる時、涙を流して、生まれ育った家や家族との別れを惜しむ。これは自然に湧き上がる感情の結果の涙というよりも、一種の儀式として受け継がれてきていたようである。花嫁は涙がでないような感情状態でも努力して泣かなければならなかったが、これは育ててくれた親への謝意の表明というより、長く激しく泣けば泣くほど双方家庭の今後の暮らし向きがよくなるという験かつぎの意味が強いと言われている。しかし、今ではもうあまり見られなくなった。

「回頭路」

花嫁を迎えた帰り道は迎えに行く時の道を使っ

てはいけない。同じ道を帰ることは「回頭路」と言われ、婚姻が元の道に戻ることは望ましいことではないので、どんなに遠回りでも同じ道を通ることを避けるのである。これは今なお残っている風習である。名古屋の花嫁道具運搬車は運搬中どんな事情があってもバック（後退）してはならないという暗黙のルールがあり、狭い道で対向車とかち合った場合のお詫び料として予め花嫁の母親は幾枚かのポチ袋（数千円を包んだ）を運転手に渡しておくのであるが、あるいはその起源は回頭路にあるのかもしれない。

「闹洞房」

結婚式の夜に同年配の親類や友人が新婚夫婦の部屋に押しかけて花嫁花婿をからかう風習である。漢代に始まり、主に邪気を祓うためのものであったが、広い地域にわたって普及していた。からかいの方法は様々であるが、格式ばった儀式の後ということもあり、多分に砕けた要素を含むことが多かった。たとえば、花婿花嫁に二人で一個の飴を食べさせたり（最後まで食べると自然にキスをする格好になる）、二人に両側から丸木橋を渡らせたり（真ん中で花婿が花嫁を抱き上げなければ渡れない）など少々羽目をはずしたゲームが夜遅くまで続く。目上の者や年長者たちはそのような場にややそぐわないので出席を遠慮するのが普通である。

この「闹洞房」は、婚礼を自宅で行っていた時代には盛んに行われていたが、婚礼の場がホテルに移った現在の都会の婚礼においてはもう見られなくなった。

「３日目の里帰り」

結婚後３日目に、花婿花嫁が嫁の実家へあいさつに行き、嫁の家が親戚や友人を招いて宴席を設ける。花婿花嫁はその日太陽が沈まないうちに、帰らなければならない。現在は必ずしも３日目ではなくなったが、里帰りの風習はまだ残っている。倉田・橋本・福田・原・酒向・岩井・松本(1978)は京都における里帰りを報告しており、山城では10日後、伏見では５日から７日後と日程にこそ違いはあるもののなんらかの形で里帰りを行っていたようである。婚礼で疲れのたまった花嫁に対する配慮は中国でも日本でも慣わしの知恵として存在していたのである。

「爆竹」

中国では、結婚式の時に爆竹をならして雰囲気を盛り上げる習慣がある。実は、結婚式だけでなく、開店、祭り、暦の行事、葬式、引越しなどあらゆるイベントに爆竹はつき物である。何をするのにもまず爆竹から始まるのは、まずは悪霊をおどかして追い払うためだといわれている。爆竹の激しい爆発音と赤い色、それから明るい光は、邪気を祓うのにとても有効であると信じられており、この考えと風習は現在に引き継がれている。

「婚礼の座席」

ホテルのない時代には、自宅と隣人の家や庭にテーブルを並べたり、自宅前の道でテントを張ったりして会場にしていた。花嫁の父母と親戚はメインテーブルに座り、友人たちは比較的上座に座る。花婿の家は花嫁の父母に特別な料理を出す。この時、花嫁の母親は料理人に祝儀を渡す。家庭によっては、花嫁のお客さんを先に招待するケースもある。ホテルでの婚礼が一般的になった現在でも、花嫁の親戚はやはり一番の上座に位置し、次に花嫁の友人と会社の人が続く。花婿の親戚と友人はその後となるのである。つまり、中国にあって婚礼の場は大切に育てられた娘さんをいただくことに対する感謝とお礼の気持ちを花婿側が示す重要な機会と場であり、両家が対外的に婚礼を披露することに主眼がおかれている日本の伝統と決定的に異なるのである。

「改口」

結婚を境に今まで親と呼んでいなかった相手の両親を、お父さん・お母さんと呼ぶことになるのであるが、その最初の儀式が「改口」である。その際、新郎新婦は相手の両親から祝儀をいただくことが多い。また、地方によっては花嫁は姑に「お母さん」と言って、頭に赤い花をつけてあげる風習もある。

「白のタブー」

伝統的な婚礼では、白がほとんど一切見られない。白っぽい靴を履くことも避けられている。なぜならば中国では白は葬式を連想させてしまう縁

起の悪い色だからである。

漢代には「五行」の説が盛んで、世界は「木、火、土、金、水」の五つの物質から成るとされていた。中国語の中の「五色」は「青」、「赤」、「黄」、「白」、「黒」で、古代の人々は「五行」と相対応し、白色は「金」に属すると考えていた。五色と「五方」の中の「東」、「南」、「中」、「西」、「北」と相対応し、白色は「西」に属する。五色は四季の「春」、「夏」、「秋」、「冬」は相対応し、白色は「秋」に属する。そのため、中国語の白色は多くの特殊な文化的意義を有している。

西は冷たい風の吹いてくる方向であり、秋は万物がしぼみ枯れるわびしい季節である。そのようなことから白色は不吉の象徴であり、喪服の色として中国ではあまり歓迎されないのである。古代では人が死ぬと、家族は麻の喪服を着て、白幕を張った柩を安置する部屋を設け、出棺の際は白いのぼりを立て、白い紙銭を焼いた。民間では葬式のことを「白事」と言っていたほどである。『史記・荊可伝』に、荊可が秦王暗殺の使命を帯びて秦国へ赴く時、「太子及宾客知其事者皆白衣冠送之。（太子も客も事情を知る者はみな白装束で見送った）」と記されている。日本でも死装束は白色を用いているが、一般的に葬式は「黒」のイメージが強く、白はむしろ純潔の象徴として婚礼に用いられてきたのとは対照的である。なお、現在の西洋化された婚礼におけるウェデイングドレスの白は受け入れられている。

「奇数のタブー」

中国人は昔から偶数を好む。特に結婚式の場合は、祝儀からいろんな用品まで、偶数が好まれる。その原因については、魯宝元（2000）は、次のように分析している。人々は古代の素朴な弁証法思想の影響を受けて、天地万物がすべて対立し、かつ統一された両面構成であると考えているのである。「天地」、「日月」、「夫婦」などがその例である。最も小さい偶数は「二」であり、対立しかつ統一された両面を代表する。「二」は両面のバランスと調和を意味し、二つ揃いが対になって美しいと見られる。「二」以上の偶数はどれも分割すれば、それぞれが一組一組の「二」になるので、偶数全般が人々に好まれるようになった。これに反して、最も小さい奇数である「一」は非常に孤独で身寄りがなく、バランスと調和が取れていないという印象を与える。奇数はすべて２で割り切れず最後に「一」が残ってしまうので、縁起がよくないとされるのである。婚礼で偶数をタブーとする日本の伝統とは全く逆の発想である点が興味深い。

「撒床」

昔は新婚夫婦用のベッドの枕の下とか布団の中とか上とかに紅棗（＝なつめ）の実をたくさん置いていた。これは「撒床」と言われ、「棗」の発音「zao」と「早」の発音が同じであることから「早正貴子＝早く良い子が授かりますように」という願いをかけていたのである。「棗」の他、「栗子（くり）」「蓮子（蓮の実）」「花生（ピーナッツ）」などある。いずれも「早生貴子」という意味が込められている。それ以外に結婚祝の縁起物の代表である、「百合」（一生の良い巡りあわせ）、「葱」（頭のいい子が授かりますように）、「桃の枝」（邪気払いする）、「斧」（幸せ）などを見てもわかるように、中国における縁起物はそのほとんどのものが、音声から「縁起の良い音」と掛けられている。

第２節　新しい婚礼

時代とともに、中国では都会から田舎まで、婚礼は大きく変化してきた。時代的に言えば、「50年代はベッド１台、60年代は飴１袋、70年代は毛沢東語録、80年代は自転車、ミシン、ラジオの家財道具のお披露目、90年代は星つきのホテルで大宴会―そして、21世紀に入ってから披露宴には個性を求められるようになってきた。」（『人民中国』―「中国の結婚式の変遷」2005）と言われている。

50年代から70年代、国も庶民たちもまだ貧しかったので、革命世代のカップルは二つの布団を一つに合わせることで「家庭」としたり、飴を引き出物として配るだけだったりして、結婚式はとても簡素なものであった。さらに文化大革命の時代には華美なものは一切排除され、伝統的な中国の華麗な婚礼は影を潜めてしまった。しかし、ここ20

年人々の生活がだんだん豊かになるにつれ、昔の風習が再び重んじられるようになってきた。

ここでは現在、中国の都市部における標準的婚礼風景を紹介する。近年、中国の日常生活は急速に西洋化してきており、それは都市部において著しい。当然、その影響は婚礼の形式にも現れている。たとえば、新郎新婦が乗る豪華な車、洋風の礼服、豪華な式場などにそれがみてとれるが、しかし、すべてが西洋のコピーであるわけでなく、中国ならではの慣わしも織り込まれ、ユニークな婚礼文化を形成している。以下、いくつかのポイントからその特徴を述べる。

「相親」（お見合い）

時代の流れに従って男女が自由に付き合うことが一般的になった結果、昔のような「提親」がなくなり、恋愛結婚が多くなってきた。しかし、いわゆる見合い結婚も少なくない。見合いの場合、二人は仲人に引き合わされて、互いの顔立ちや性格などを初めから了解する。そして、互いに気に入れば付き合いが始まる。これは「相親」と言われ、六礼にはない現代的な縁談の重要な要素である。

「試婚」

正式に結婚する前に、うまくいくかどうか試しに同居する、いわゆる「同棲」である。90年代から、時代の先端を行く若者たちの間で始まったもので、当初は伝統道徳を違反するものとして批判されていたが、現在、特に都会ではすでに市民権を得ている。

「訂親」

「試婚」が順調に進めば、「訂親」の儀を行う。男性側は金品（ダイヤモンドのアクセサリーやお金など）を正式に女性側に贈る。昔は、花嫁側が求める結納金を揃えられなくて、お嫁さんをもらえない人も少なくなかったのであるが、現在は一部の農村部を除いて、結納金で縁談が破談になることは極めて稀である。しかし、家柄や身分のつりあいを重んじる伝統的な意識は今なお残っている。

「結婚式」

日本の神前結婚式は明治33年の皇太子の神道によるご成婚から一般に普及していったという説が有力であり（石井，2005）、このころから結婚式と結婚披露宴の違いが明確になってきたのであるが、中国は日本と違い、結婚式と披露宴の厳密な区別がなく、儀式的な結婚式を催す習慣があまりない。また、日本のような宗教色もない。披露宴での婚礼のお披露目が結婚式の役割を含んでいると考えられている。

以下、現在中国の一般的な結婚式の流れと特徴的なポイントを紹介する。

<u>お迎え</u>

前述のように中国の婚礼においては新郎が新婦を家まで迎えに行くという儀式があるが、おおむね以下のような手順で進行する。

1．新郎は新婦の実家に高級車（リンカーン、ベンツ等）で迎えに行く。
2．実家に着いたら爆竹、花火などで歓迎され家に招き入れられるが、簡単には入れない。新婦の友達か兄弟などに入口でクイズを出されたり、いたずらをされたりする。
3．新婦の母親が、ナツメやら落花生やら栗など色々な木の実（これらの食べ物は、子宝に恵まれるという意味がある）、果物などを供す。もちろん餃子も欠かせない。
4．新郎が新婦の両親に挨拶をする。
5．ボンネットに造花などの装飾を施した車で式場に向け出発する。その際にも爆竹、花火を鳴らし派手に送り出す。

地方や家庭によっても多少の違いがあるが、以上が式場に向かうまでの一般的風景である。一般の列席者はホテルの前で花婿、花嫁をクラッカーを鳴らして迎える。この後ホテルで結婚式を兼ねた披露宴が執り行われる。儀式的なものは前半にまとめてなされ、後半は宴会に移行する。以下、標準的な流れを紹介する。

<u>式次第</u>

1．奏楽を伴い新郎新婦の入場。
2．結婚主宰者の挨拶と祝辞。
3．結婚証明人の祝辞。
4．三拝の儀式

三拝には「拝天地」「拝父母」「夫婦対拝」の

三つの意味が込められている。

①「拝天地」（意味：天地を拝む。字の通りである。）昔は新郎新婦が並んで跪き、頭を地につけて天地に一礼をするが、今は立ったままでやる。これは「拝天地」という儀式。以前は、この“天地”を自然や皇帝として拝んでいたようであるが、今はその意義は薄れ、習慣として残っているだけである。仕事、生活全般に渡り、助けていただきありがとうという意味が込められているという。

②「拝父母」（意味：両親を拝む。字の通りである。）新郎新婦がお互いの両親に一礼をする。苦労を堪え忍んで育ててくれた両親に感謝の意を表す。

③「夫婦対拝」新郎新婦が向い合って互いに一礼をすることである。この意味は「比翼双飛」（直訳：翼を並べて共に飛ぶ）や「共同進歩」（一緒に歩んでゆく）、「互敬互愛」（互いに尊敬し、愛し合う）、「白共携志」（白髪になるまで添い遂げる）という意味がある。ほかには、元気な子供を授かるようにという意味もある。

5．新郎新婦の指輪交換。

6．新郎新婦ご両親代表挨拶。

7．交杯酒（意味：持ったグラスを交差させて、腕を組んで一緒にそれぞれの杯を飲み干す。）これからは一心同体に、苦楽を共にして進んで行こうという２人のための儀式である。

そして、シャンパンによる祝杯、ウエディングケーキカットと進み、そのあと宴会が開始される。宴会が始まると、新婦はすぐお色直しのために中座する。お色直しの後再入場した新郎新婦は、お酒、タバコ、飴などを持って各テーブルに挨拶をしにまわるのである。一人ひとりに新郎がタバコを一本お礼に差出し、新婦がライターで火をつけてあげる。日本で言うキャンドルサービスであるが、中国では「点煙」と呼んでいる。そして、一人ひとりにお酒を注ぎ、飴をすすめる。テーブル全部まわれば席につく。

以上が、結婚式の流れである。最後に特徴的なポイントを記す。

「赤色基調」

ウエディングドレス中心の時代になってからは、白も結婚式のタブーではなくなったが、赤はやはり中国の結婚式のメイン色である。中国の披露宴の会場に入り着席すると、赤い雰囲気に取り囲まれる。座席にはピンクと赤のカバーがかけられ、ナプキンまで赤である。それだけでおめでたい雰囲気が醸し出される。新郎・新娘は入場後、金屏風の代わりの赤い大きな布の前に立つ。白いウエディングドレスを着ながらも、赤いハイヒールを履いている花嫁の姿はおそらく中国でしか見られない風景であろう。祝儀袋も赤。参加者も衣装やアクセサリーには明るい色を取り入れるのが礼儀であり、白黒の配色は今なお回避されている。

「結婚式の開始時間」

一般に正午までに花嫁を迎えて帰らなければ、縁起が悪いと思われている。したがって、現在中国の結婚式の開始時間は11時18分、28分、38分、48分、58分の中から選ばれるのが普通である。このように半端な時間に開始時間が設定されるのには理由がある。「８」は「发财（金もうけ）」、「发展」の「发」と発音が近く、縁起のいい数字であるからである。これは、金銭追求をタブー視する革命時代を乗り越えた現代中国のひとつの象徴的現象であるともいえる。ちなみに、今度の北京オリンピックは８月８日８時に始まる。

「お祝い」

ご祝儀の渡し方も日本とは違い、赤い祝儀袋に入れて渡すのが礼儀である。ご祝儀を白い封筒に入れるのは慣習に反する。昔は結婚式当日までに家まで持参することによって誠意を表していたようであるが、現在では結婚式当日に受付で渡すことも失礼なことではなく、ほとんどの人がそのようにしている。あるいは会場で新郎新婦に渡したり、前述の「点煙」の機会をとらえて直接手渡したりする場合もある。

「記念写真」

結婚に際して新郎新婦が力を入れるのが記念写真である。結婚式の半年前から３カ月ぐらい前に写真館に出向き、様々な貸し衣装を取り替えながらスタジオや屋外で撮影を行う。ヘアメークの担

当者がついて何十枚も撮影し、豪華本風のアルバムを作るという力の入れようである。1000元－１万元（約１万4400－14万4000円）ほどの費用をかけ、新居に飾ったり、招待状に飾ったり、結婚式にその映像を流したりする人も少なくない。このように記念写真に対する入れ込みが日本と比較にならないほど強いので、写真を褒めることは中国では大いに意味がある。

引用文献

浅尾新甫　1951　新生活運動とは？　「経営者」5(11)　日本経営者団体連盟出版部.
石井研士　2005　「結婚式　幸せを創る儀式」　日本放送出版協会.
岩上　力　1986　「儀式作法入門」　光琳社.
岩崎正昭　1989　「北海道と道民を知る基礎知識」北海道ブックス９　北海道問題研究所.
江馬　務　1949　結婚方式の変遷とその改良　「東山論集」1（京都女子大学），16－55.
倉田正邦・橋本鉄男・福田栄治・原　泰根・酒向伸行・岩井宏美・松本保千代　1978　「近畿の祝事」　明玄書房.
佐藤朝子　1999　「北海道の冠婚葬祭と暮らしのおつきあい」　北海道新聞社.
東郷富規子　1992　江戸後期における京都商家の生活文化－婚礼のしきたり　「園田学園女子大学論文集」26（園田学園女子大学），13－22.
濱　保久　1995　冠婚葬祭の実態と意識に関する地域比較研究　日本応用心理学会第61回大会発表論文集49.
北海道新聞情報研究所　1993　「「北海道」がよくわかる」北海道新聞社.
矢島　睿　1978　「北海道の祝事」　明玄書房.
吉村　亨　2006　中国・日本の婚礼茶俗と文化コミュニケーション　「人間文化研究」17（京都学園大学人間文化学会），111－158.
鲁 宝 元　2000　「汉语与中国文化」　华语教学出版社
周 国 強　2003　「中国年中行事冠婚葬祭事典」明日香出版社
丁 秀 山　1988　「中国の冠婚葬祭」　東方書店
人民中国 2005　2005.3.16（雑誌）